

平成23年度 研究計画

四日市市立常磐西小学校

平成23年度 研究主題

「学ぶ喜びを味わい、ともに高め合う子をめざして」

～聴き合いから学び合いの生まれる授業の創造～

—7年次— 《領域 全領域》

I はじめに（本年度までの研究の経緯）

本校では、子どもたちが主体的に学習する姿と、友だちとかかわり合って学ぶ姿を求めて平成17年度より「学ぶ喜びを味わい、ともに高め合う子をめざして」を主題とし、研究を進めてきた。「聴く力」「話す力」について研修を続けてきたが、19年度からは、特に「聴くこと」の指導に重点を置いての取り組みを始め、「友だちの考えを聴くのが楽しい」「友だちに聴いてもらえてうれしい」という、なかまとのかかわりの中で学んでいく喜びを味わえるような授業を模索してきた。子どもたちに「聴き合う関係」をつくっていくために大切なことや、そのような授業の中での教師の役割について学ぶために、19年度より2年間は、四日市市教育委員会の重点課題研究推進校委嘱を受け、東京大学大学院の佐藤学先生にご指導いただき、19年度以降は、元常磐小学校校長の石井順治先生にご指導を受けながら、研究を続けている。



子どもたちに「聴き合う関係」をつくっていくために大切なことや、そのような授業の中での教師の役割について学ぶために、19年度より2年間は、四日市市教育委員会の重点課題研究推進校委嘱を受け、東京大学大学院の佐藤学先生にご指導いただき、19年度以降は、元常磐小学校校長の石井順治先生にご指導を受けながら、研究を続けている。

19年度からの2年間で私たちの学んだことは大変大きかった。「授業とは何か」「子どもの学びとは」「子どもたちの『聴き合う』『学び合う』姿とはどのような姿か」などを考えてきた。そして、「そのような授業における教師の役割とはどういうものか」さらに、「教師同士の学び合う関係（同僚性）とは何か」について、授業づくりにとどまらず、学校づくり全体に及ぶ多くの示唆をいただいた。また、「聴き合う関係」を育成している先進校への視察にも多くの教師が訪れ、それぞれ研修を深めてきた。

20年度からは副主題を「聴き合いから学び合いの生まれる授業の創造」と設定し、さらに「学び合い」をめざして取り組みを続けている。「授業はすべての子どもの学びのためにある」という基本理念に立ち、教室にいるすべての子どもが学ぶ喜びを味わい、なかまと共に学び合う喜びを味わうような授業の創造に努めていきたい。

Ⅱ 「聴き合いから学び合いの生まれる授業」 をめざして

1. 「学び」とは

「学び」とは何か。人が今まで知らなかったことを知る。あやふやだったことがはっきりと分かるようになる。あるいは、分かっていたつもりであったことが逆に分からなくなるという場合もあるのかもしれない。知りたい・分かってほしいという欲求や葛藤が自分の中で起こり、追究を経て、自ら解決しようとする一連の自己変革の姿であると考え。

子どもたちが授業の中で「学ぶ」ためには、「もの（教材）・自己・なかま」としっかりと出会うことが大切である。教材にしっかりと向き合い、自分自身の思いや考えを持ち、同じ教材に出会ったなかまと対話し、再び自分自身に返していく。一人ひとりから出発した「学び」は、なかまとの対話や活動による「学び合い」を通してさらに深化し、最後に自分の「学び」として戻っていくのである。

子どもの「学び」とは、子どもから生まれるものである。子どもを主体とし、子どもが発見していけるような授業の創造をめざしていきたい。

2. 「学び合い」を生み出すために

(1) 支え合うなかま

自分の居場所のあるあたたかいクラス。その中に「学び合う」なかまと、「学び」を支える先生がいる。そのことは子どもたちに学校を楽しいと感じさせるだろう。自分から分からないことを、「分からない」「教えて」と言えば、気持ちよく答えてくれる友だちがいる。一方で友だちに教えるなかで、自分自身の言葉もより豊かになり、より理解が深まっていくという「学び」もある。



「分からない」を誰かが口にするだけで、同じように分からなかった子どもにとって、そのことで学ぶチャンスが訪れる。授業を子どもたちのものにしていくためには、子どもたちの「分からない」を生かしていくことが大切である。そのためには、「分からない」が出てくるような教師の姿勢、「分からない」が普段から出せるような学級の雰囲気、「分からない」ことに寄り添えるようななかまをつくっていくことが大切だと考える。

(2) 聴き合うかわりを育むために

① 教師が「聴く」ということ

子どもたちが、互いに聴き合えるようになるためには、まず、教師がもっともよ

い聴き手であることが大切である。一人ひとりの言葉に耳を澄まし、ていねいに聴くこと。どの子の発言も大切に受け止め、小さなつぶやきや予想外の発言にも耳を傾けて聴くこと。一部の子どもたちの意見だけで授業を進めたり、教師にとって都合のよい意見だけを取り上げたりしないように気をつけたい。

子どもの言葉には、時には、意味がないように思えることや、短い言葉でしか表現されない言葉もあるだろう。また、発言しなくてもじっくりと聴いている子どももいるかもしれない。その表現された言葉の裏にある思いを感じたり、黙って聴いている子どもの表情までも感じながら聴いたりするために、日頃から一人ひとりの子どもの背景を捉える努力をしたい。

そのような教師の聴き方は、一人ひとりの子どもを尊重するというなかまづくりの基本である。そしてそのことが、クラスの子ども全員を学びの輪に参加させていくことにつながると考える。

② 「つなぐ」という教師の役割

教師が子どもたちの発言をつなぐためには、子どもの発言の真意を探りながら聴くなかで、子ども同士の発言の「つながり」を見つけ出し、支援する出場を判断して、子ども相互のかかわりを築いていく必要がある。

さらには、子どもの意見を教材文や最初の課題に戻して、教材と子どものおもいをつなぐことが大切になってくる。国語科では情景を読みえがくために、「もう一度読んでみよう」と投げかけたり、社会科の課題解決の場では「どの資料からそう考えたのか」などと教材に戻したりして、新たな気づきを生み出せるような働きかけが必要である。

一人ひとりの子どもの発言をじっくり聴きながら、どこで立ち止まるのか、子どもの発言から何を課題として取り出せば、学びの質を高められるのかを、授業の中の目の前の子どもの姿から教師自身が判断し、展開していかなければならない。

③ 聴く力を育てる

教師のこのような聴き方をまねて、子どもたち自身の聴き方が育っていくのではないだろうか。子どもたちは授業のスタイルから大切なポイントを感じ取り、友だちの意見を受け入れる聴き方ができるようになり、共通点、相違点を考えながら聴いたり、何かを発見するような聴き方をしたりすることができるようになると思う。

教師は、友だちの発言にかかわって話した



子の聴き方をほめたり、「共感しながら聴く」などの聴くときのイメージを持たせたりしながら、あせらずに、ゆっくり、じっくりと子どもの力を伸ばしていきたい。

(3) かかわり合う学びの場づくり

① 教材との出会わせ方

22年度までは、国語科の読み物教材を中心に取り組んできたが、他教科・領域での課題解決学習における「学び合い」にも徐々に視点を当ててきている。それまで、「読みえがく」「読み味わう」といった考えや思いを広げていく学びに焦点を当ててきていたが、収束すべき結論のある課題など、その教科・領域ならではの学力をつけるために、どのように「学び合い」を成立させていくのが23年度の大きな研修課題となっている。

どのような教材・課題をどのように子どもたちに提示することがより効果的な「学び合い」学習を生み出すのか、さまざまな教科・領域で組み立てられるよう、研修を進めていく。



② 対話のあるペア・グループ学習

子どもたちが学び合うようになるための場の設定として、「ペア」や「グループ」で話し合ったり活動したりする場面を、1時間の授業の中で何度か取り入れると有効であることが中学校区でも確認された。ペアは主に低学年で、グループは基本的に4人で、中学年以上で取り入れていくとよい。グループ（ペア）学習のメリットは、どの子にも発言の機会があり、聴き合うかかわりを少人数で確実にに行えること、疑問などが出しやすいことなど、たくさんあげられる。グループ学習に入るタイミングや、課題の設定などは、マニュアルはなく、子どもの状況に応じて臨機応変に行うことが重要である。

ペア・グループ学習の質を上げていくためには、「対話」のある学び合いにすることが大切である。発表の羅列に終わらせず、それを対話に変えていくためには、まず、聴き方をみがくことであろう。友だちの顔を見て聴く、反応して聴く、という基本的な聴き方が、まずグループでできなければ、全体でもできない。また、分からないことをグループのなかまに尋ねて、考え合うことなども学び合いが生まれるよい機会となる。教師はグループの実態を見て、支援していく必要がある。

しかし、ただグループ学習を入れたらよいということではない。あくまでも、子どもたちの学びの状況を見ながらの教師の判断である。グループ学習の時間は長すぎても短すぎても、学びが生まれにくい。子どもたちの状況を見ながら、切り上げる時間を考え

たい。

今後も、どのようなグループ学習が子どもたちの学び合いを深めるために有効であったかという検証を、学年部などでの実践交流や、提案授業の事後検討会などで話題にしていきたい。

3. 学びの質を高めるために

(1) 教材研究

学びの質を高めていくためには、教師は教材研究をしっかりとし、その教材から学ばせたいものが何なのかをはっきりと持っておくことが大切である。そうすることで、たとえつたない言葉で子どもが話しても、その子の言おうとすることを、教師が耳と心を傾けて聴くことで、しっかりと受け止めることができる。また、子どもたちがどこから発言してきても、大事なところへたどり着くまでの幾筋もの流れを想定することができる。さらに、子どもたちが夢中で学ぶような少し高いレベルの課題を考えたり、学び合いが生まれるような活動を仕組んだりすることができる。

(2) 基礎・基本の力

昨年度末に「学び合い」を支える基礎・基本の力を育てていくことの重要性が話し合われた。相手を意識して話す力、話し手の意図をイメージして聴く力、語彙力・表現力、グループでの学び方のスキル、内面にある学びを深く自分のものにするために書く力など、昨年度までの研修で子どもたちにつけたい力が具体的に見えてきた。しかし、そもそもさまざまな教科・領域における「基礎・基本」とはどんな力をさすのか、本年度改めて考え合っていくことが必要である。

(3) 学びの評価

一人ひとりの子どもの実態をつかみ、その子につけたい力を明確にもって授業に臨むこと、そのために子どもの思いのもとになっている背景を捉えることが授業の基盤であるが、その上で、1時間の授業で子どもが何をどのように学んだのかを評価することが大切である。その子につけたい力が伸びているのかを評価し、手立てを考え次につなげていくために、授業の最後にまとめを書かせるなど、教師が一人ひとりの学びの事実を捉える方法を考えていく。

4. 教師集団の学び合い

「学び合い」は子どもたちだけに期待するのではなく、われわれ教師集団も互いに学び合い、共に成長し合う関係でありたいと思う。そのために、教師一人ひとりが「聴き合い、

学び合う」授業に対する個人の研究テーマを設定し、授業の公開を通して同僚や助言者からアドバイスをもらいながら、年間を通して日々の授業を見直していく必要がある。

授業の事後研修会では、それぞれの発言を尊重し、対話の中で課題を見つけていくように心がける。討議の柱は特に設けず、自由に何から話してもよいという雰囲気大切にす。そうすることで、より多面的な授業の捉え方を学ぶ機会にもなる。同僚の公開した授業を、他人事に終わらせず、その人のチャレンジしたいことを大切に考え、「自分だったら」どうするか、その対応のあり方をみんなで協議していく。その中で、私たち自身の「授業を見る目・見る力」を確かなものにしていきたい。そして、自分の見てきた一つひとつの授業から、自分自身が感じたことや得たことを、自分の前にいる子どもたちと共に次の授業にいかしていけるような建設的な話し合いをしていくことが、私たち自身の「学び」であると考え。そのためにも、できるだけ多くのことを感じられるよう、今年もできるだけ多くの授業を参観するようしていきたい。互いに授業を開き、見合うことが、互いを育て、互いを支える関係を作ることになる。そして、さらに、その教師の学び合う姿勢が、子どもたちの学び合いを支えると考えからである。

